

2005●図書館展示9月

《田園》交響曲

自然の中のベートーヴェン



Ludwig van Beethoven
1770-1827

企画・構成●音楽研究所ベートーヴェン研究部門

期間・9月5日～10月8日
場所・図書館ブラウジングルーム・AV資料室

《田園》交響曲 自然の中のベートーヴェン

《田園》交響曲は、ベートーヴェンが残した 9 曲の交響曲のなかでも、ひときわ個性的な作品です。交響曲の歴史やベートーヴェンの創作活動における《田園》の位置づけ、創作背景、他の作品との関連、後世における《田園》の受容、あるいは自然とベートーヴェンの関係など、切り口によって《田園》の放つ光は万華鏡のように変幻自在です。今回の図書館展示では、《田園》交響曲のもつ多彩な魅力の一端に迫ってみたいと思います。

企画・構成 音楽研究所 ベートーヴェン研究部門



Contents

《田園》交響曲 六つの視点	土田英三郎	2
《田園》の成立から初演まで	加藤拓未	5
《田園》交響曲その後	安田和信	9
展示パネル紹介	加藤拓未・安田和信	12
展示楽譜紹介	加藤拓未・安田和信	15

表紙 「小川でのベートーヴェン」 F.ヘーギ作の銅版画による水彩画 1834年頃



《田園》交響曲 六つの視点 土田英三郎

「パストラル・シンフォニー」

ベートーヴェンの交響曲第6番(田園)(1808)は、第3番(エロイカ)、第5番(一般に(運命))、第9番などと並んで、おそらく最もよく知られた交響曲でしょう。これらの作品は、いずれも音楽史あるいは交響曲の歴史のなかで革新的な作品として位置付けられ、その新しさばかりが強調される傾向にあります。それも当然のことですが、伝統との結び付きも見過ごすことはできません。「新しさ」とは「過去」との関係においてこそ輝いてくるからです。第6番は伝統との関わりが特に強い作品です。それだけにベートーヴェンの新しさがひととき目立ってくると言えるでしょう。

「田園交響曲」というジャンルがあります。これは18世紀にかなり流行した音楽で、パストラル(田園詩/曲、牧歌詩/曲)という古代以来の伝統と、交響曲という18世紀に成立した新しい器楽の在り方が融合したものです。パストラルの性質上、降誕祭のための音楽として書かれることが多かったのですが、そうしたキリスト教的な含みとは直接関連しない作品も出てきます。リチャード・ウィルの最近の研究(2001)では、古典派の時代にこの種の作品を書いた作曲家として40人ほどが挙げられています(ベートーヴェンを除く)。そのなかでベートーヴェンの田園の直接の前身とも言えるのは、ユスティーン・ハインリヒ・クネヒトの(自然の音楽的描写)(1784)で、ベートーヴェンと同じ5楽章(ただし実質は3楽章)であるほか、多くの共通点をもっています。クネヒトの理論書を所有していたという事実もあるので、ベートーヴェンがこの作品を知っていたことは、ほぼ間違いありません。

「性格交響曲」

もう少し視野を拡大してみると、田園交響曲は性格交響曲というジャンルの一つとして見ることができます。これは種々の「キャラクター」、例えば軍隊(戦争)、狩、嵐といった情景、哀悼などの情感、道徳的、聖書や文学などの物語、それに民族性や国民性を表現したもので、その実態は、物語や情景の具体的な描写から、雰囲気の漠然とした暗示に至るまで様々です。広義には標題交響曲に含まれますが、近年、古典派特有の交響曲の一樣態として注目されつつあります。前記のウィルは63名の作曲家を挙げていますが、少し範囲を広げると100名くらいにはなるでしょう。レーオポルト・モーツァルト作あるいはミハエル・ハイドン作と言われてきた(おもちゃの交響曲)(近年ではエトムント・アンゲラー1740-94が有力)、ヨーゼフ・ハイドンの(朝)(昼)(夕)(1761)、(告別)(1772)、第9に先駆けて合唱付き交響曲となったゲオルク・ヨーゼフ・フォークラーの(バイエルン愛国交響曲)(1806)やペーター・フォン・ヴィンターの(戦争交響曲)(1813)などもこれに含まれます。

ベートーヴェンは田園のスケッチの段階で「シンフォニア・カラクテリスティカ、あるいは田舎の生活の思い出」とメモしており、このジャンルの意識があったことを示しています。ベートーヴェンの前記の他の交響曲も全て、この性格交響曲の観点から考えることができます。

「音画」の問題

田園曲や性格曲は当然、自然の情景を音で描写することが多いわけですが、当時そうした露骨な音画表現は、識者や批評家から低級な音楽として批判されていました。それは一

つには、純粋な器楽を高級とみなす新しい美学が台頭してきたからです。

ベートーヴェンの〈田園〉は明らかに自然描写的な部分を含んでいます。そのことを自覚していた作曲者は、それが作品への評価にマイナスとなるのではないかと、かなり気にしていたようです。スケッチから総譜化、初演に至るまで、全体や各楽章にどのようなタイトルを付けるかをめぐって、しきりに推敲していることから、それはうかがえます。作曲中のスケッチ帳には、楽想のメモに交じって、「説明なしでも全体は音画としてよりも感情として理解される」「どんな音画でも器楽で度がすぎるとだいなしになる」といった、自己弁護とも自戒ともとれる言葉が記されています。初演時のチラシと初版楽譜(パート譜)では「音画よりも感情の表現」と明記されます。単なる描写音楽ではなく、自然を前に感動した人間の気持ちの表現であることを強調しているわけです。つまり、田舎に着いたときの喜び(第1楽章)、小川のほとりで感じられる様々なイメージ(第2楽章)、農民か牧人たちの踊りの楽しさ(初めて人間が登場する第3楽章)、嵐の脅威への畏怖(第4楽章)、嵐のあとの感謝の気持ち、自然の崇高さと理想郷(アルカディア)への賛美(第5楽章)というように、自然という対象そのものよりも、人間の側の主体的な眼差しが問題となっているわけです。

ところが、初版(総譜)以来、近年に至るまで、全てのエディションでは全体のタイトルからこの「音画よりも感情の表現」が抜け落ちていきます。これは明らかに出版社側の責任です。ようやくジョナサン・デル・マーによる新校訂版(ペーレンライター、1998)で、これが復活されました。各楽章のタイトルも、ベートーヴェンの意図を再検証した結果、従来版とは違ってきている部分があるので、以下に全体を挙げておきます(下線部が従来版と異なる箇所)。

交響曲第6番 / 田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出(音画よりも感情の表現)

1. 田舎に着いたときに人の心に目覚める心地よく晴々とした気分。
2. 小川のほとりの情景。
3. 田舎の人々の楽しい集い。
4. 雷 Donner、嵐。
5. 羊飼いの歌。嵐のあとの、慈しみに満ちた、神への感謝と結びついた気持ち。

自然と平和と自由の賛歌

ベートーヴェンの自然好きは広く知られています。この曲でも至るところにその痕跡があって、聴き手の共感呼び起こします。〈田園〉が自然賛歌であることは言うまでもありません。

ところで第5楽章の「神への感謝と結びついた」が削られたのは、従来ベートーヴェンの最終意図として考えられていました。そのため、あえて「神」を削除したのは、宗教的な匂いを取り除き、神を引き合いに出さずに自然と人間との直接の関係を見据えようとする、啓蒙主義的な姿勢のあらわれだと解釈されたこともあります。ところが、資料を丹念に調査すると、この削除は出版社側のミスか独断であったことが分かります。

「神」という言葉があるうとなかろうと、当時の西洋人にとって自然の背後に神を想定するのはごく当然のことだったでしょう。しかしまた、ベートーヴェンの音楽はキリスト教という特定の信仰を超えた、なにか偉大な存在、造物主への想いを感じさせます。またナポレオン戦争の混乱期では、田園のイメージは平和に繋がるでしょう。さらにフランス革命後の時代にあって、革命に理念的な共感を覚えていたベートーヴェンにとって、自然賛美はもしかすると自由の賛美とも繋がっていたのではないのでしょうか。フィナーレで何度か繰り返される憧れにも似た訴えと最後の静かな祈り(ベートーヴェンはフィナーレのスケッチのある箇所に「おお主よ、あ

なたに感謝します」と書いています)。容易には手に到達することのできないユートピアへの希求をここに聴くのは、歴史的にも美的にも、まんざら見当違いではないでしょう。

関連作品

ベートーヴェンが田園交響曲を作曲するにあたってモデルとなった作品、あるいは下地となった作品は、かなりの数にのぼると考えられます。他人の作品では、クネヒトをはじめとする田園交響曲のほか、何よりも恩師ハイドンのオラトリオ(天地創造)(四季)が挙げられます。この2作は豊かな自然描写と自然賛美にあふれた曲で、当時ウィーンではとてつもない人気作でした。ライヴァル意識の強かったベートーヴェンは、なんとかこれらを凌ぐ作品を世に問いたかったはずです。しかし、同じオラトリオだと二番煎じになりかねない。そこで交響曲で、ということだったのかもしれませんが。

自作では八長調ミサ曲(1807)がオラトリオと田園交響曲を媒介する作品となった、という説もあります。そのほか七重奏曲作品20の第2楽章、ピアノのためのバガテル作品33/3、ピアノ・ソナタ第15番作品28(田園)、バレエ(プロメテウスの創造物)第10楽章 パストラレ、歌曲 五月の歌 作品52/4、うずらの鳴き声 WoO 129、自然における神の栄光 作品48/4、神の力と摂理 作品48/5などが挙がってきます。

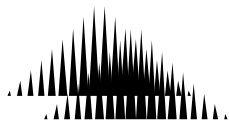
これらは音楽表現上のトポスや、自然と宗教にかかわる内容など、何らかの意味で田園交響曲との関連を示す作品群です。こうしたコンテキストから(田園)を捉えてみると、特定のジャンルを超えた広い繋がりが見えてきます。

音楽

さて、最も重要なのは音楽そのものです。(田園)は、小川や鳥の鳴き声、雷、稲妻、嵐などの描写的表現のほか、ドローン(低音の保続音)や空虚5度、へ長調という調選択、楽節の反復、単純さを装った和声、緩やかな和声リズム、アルペン・ホルン音型など、パストラレのトポスをふんだんに備えています。神の楽器であるトロンボーンも(この曲では宗教的雰囲気のために使われているわけではありませんが)、降誕祭のための田園交響曲ではよく使われた楽器です。

このように伝統的なものと多くの共通点をもっている一方で、音楽の作り方はきわめて斬新です。何よりも、中期ベートーヴェン特有の動機法と形式造形。(運命)と全く対照的でありながら、断片的な動機の高密度な扱いでは軌を一にしています。冒頭の数小節に含まれる多数の動機がその後徹底的に活用されるのがよい例です(ちなみに、まとまった旋律ではなく、4小節という短いモットーで始まりフェルマータで一時休止した後、直ちに展開となる、というのも(運命)と同じ)。パストラレの諸要素が、多くの田園交響曲のような楽想の単なる羅列ではなく、ソナタ形式のシンフォニックな構造のなかにてらいもなく溶け込んでいるのは、まさにベートーヴェンならではのことで、一方、第2楽章の再現部冒頭では、ピアノで七つもの動機が同時に重ねられ、とてつもなく濃いテクスチャが現出します。この静かな万華鏡の輝きは、ベートーヴェンでも異例の手法と言えるでしょう。

以上のほか、楽器法、楽譜資料、エディション(編曲譜も含む)、受容史と作用史、演奏史、解釈史など、様々な観点がありますが、そうしたものの総体が現代の(田園)交響曲像にほかなりません。 土田英三郎(つちだ えいざぶろう・ベートーヴェン研究所所員・東京藝術大学教授・本学講師)



《田園》の成立から初演まで

加藤拓未

《田園》の冒頭を聴きますと、田舎に着いて、最初の深呼吸をしたときのような清々しさを覚えるのではないのでしょうか？ いかめしい顔のベートーヴェンとは、ほど遠い爽やかさです。ですが、音楽を聴き進めると、やはりベートーヴェンそのもの。そんな独特な魅力をもった《田園》の成立過程、そして初演の様子を追ってみました。

ベートーヴェンの作曲手順

それでは、《田園》の成立を追ってみましょう。まずベートーヴェンは、作品の作曲から初演まで、基本的に次の ~ の手順を踏んだと考えられています。

スケッチ作業

総譜の作成

パート譜の作成、配布(演奏者、練習開始)

初演

ベートーヴェンが作品を作曲するときは、たいてい“スケッチ”と呼ばれる下書きの作業から入ります。そして、専用の“スケッチ帳”のなかに、作品の構想や、主要なアイデア、旋律を次々とメモってゆきました。絵画でいうところの“デッサン”にあたる作業と言ってもいいかもしれません。スケッチが一定の量たまると、今度はそれをもとに、ベートーヴェンは作曲をおしすすめ、どんどん総譜にしてゆきます。それが完成すると、次にパート譜をつくり、演奏者に配ります(手書きで写します)。さらに練習を行ない、初演をむかえるのです。通常、こうした手順を通して、ベートーヴェンは作品を世に送り出しました。では《田園》も、その手順にしたがって見てゆきましょう。

《田園》のスケッチ その1 (1803~04年頃)

ベートーヴェンが本格的に《田園》を作曲したのは、1808年の3月から9月にかけてです。ですが、それ以前にも、《田園》の構想を練った(と思われる)スケッチがあります。その最も古いものは、通称“エロイカ”スケッチ帳(1803年6月頃から1804年4月頃に使用)に含まれています。このスケッチ帳は、ベートーヴェンが交響曲 第3番《英雄》(作品55)の構想を固める際に使ったことで有名です。そのなかに、のちの《田園》を予感させるスケッチが四つあるのです。

たとえば、そのうちの一つは「アンダンテ・モルト 小川をつぶやき 小川が大きくなるにつれて、音も低くなる」といった記述があり、三連音符の波のような旋律が書き込まれています(譜例1)。確かに《田園》を予感させるメモです。また、第3楽章におけるトリオの旋律(165~168小節のヴァイオリン声部)とソックリなスケッチもあります(譜例2)。ということは、《英雄》の作曲に打ち込みながら、ベートーヴェンは《田園》のアイデアも練っていた ということになるのでしょうか？

(譜例1)

Murmeln der Bäche

Andante molto

1mo

2do

je größer der Bach, je tiefer der Ton

(譜例 2)



その可能性がまったくないわけではありません。ただし、ベートーヴェンは、なんでも自分のスケッチ帳に書き込む人でした。もちろん、それは曲全体のコンセプトや、旋律のアイデア、清書一步手前のような完成度の高い草稿といった作曲に関するものが多くを占めています。しかしその一方で、書くには書いたが、結局、使われずにお蔵入りしたメモ、そして意味不明な“落書き”のようなものもかなりあるのです。本当に様々なレベルのメモを残しているため、ちょっと〈田園〉を思わせる短い記述があったからといって、この時点でもうすでにベートーヴェンの頭のなかで、あの雄大な〈田園〉の響きが広がっていた……と想像するのは、早合点といえるでしょう。

おそらく、こんなメロディーを使って、小川のせせらぎのような曲をいつか書こう(どんな曲になるかは分からないけど)、といったくらいが実際のところだったのではないのでしょうか？

《田園》のスケッチ その2 (1807年7~8月頃)

1804年のはじめに〈英雄〉を完成させたベートーヴェンは、翌年、今度は初のオペラ作品、〈レオノーレ〉(作品72)の作曲に打ち込みます。さらに1805年から6年にかけては、交響曲第4番(作品60)や、ピアノ協奏曲第4番(作品58)、3曲からなる弦楽四重奏曲セット(ラズモフスキー)(作品59)、ヴァイオリン協奏曲(作品61)など、次々と大作を生み出しています。ですが、“エロイカ”スケッチ帳以降、〈田園〉につながるようなスケッチは、しばらく出てきません。そして1807年には、初めてのミサ曲となる作品86(八長調)に着手します。

実は、次に確認されている〈田園〉のスケッチは、このミサ曲八長調の作曲中に書かれたものなのです。1枚のスケッチ紙として残っているもので、書かれたのは、だいたい1807年の7月から8月頃。このスケッチでは、〈田園〉の全5楽章中、4楽章のコンセプトが練られており、そこにはすでに「シンフォニア・パストレッラ *Sinfonia pastorella*」というタイトルらしきものが書き込まれています。また、第1楽章の主題は、完成時ともはや同じです(譜例3)。他に「雷」や「嵐」という言葉も見られます。どうやらこの時点で、ベートーヴェンは作品全体のイメージを、かなり具体的に持っていたようです。

(譜例 3)



“田園交響曲”スケッチ帳(1808年1月~9月頃使用)

ところが、ベートーヴェンはすぐに〈田園〉の作曲には取り掛かってはいません。まずはミサ曲八長調を完成させ、1807年の9月にアイゼンシュタットで初演しています。その後、オッペルスドルフ伯爵(1778~1818)に依頼された、交響曲第5番(運命)の作曲に取り掛かり、翌1808年の2月頃までに完成させました。そして、先ほどのスケッチから半年がすぎた1808年3月から〈田園〉の作曲に入ったのです。

(運命)と違い、(田園)は作曲の依頼があったわけではありません。ということは、ベートーヴェンはなにかしら意を決し、自発的に作曲を行なったこととなります。その動機は、なんでしょうか？残念ながら、それは分かっていません。しかし、ベートーヴェンが、新しい交響曲の作曲を意欲的に進めたことは確かでしょう。彼は、スケッチ帳をとりだし、1808年の3月から6月頃にかけて、どんどんと(田園)のスケッチを書き込んでゆきました。このスケッチ帳が、通称“田園交響曲”スケッチ帳と呼ばれているものです。

総譜とパート譜の作成(1808年夏)

スケッチ作業が終わったベートーヴェンは、それをもとに肉付けを行ないながら、総譜に仕上げてゆきます。その作業は、おそらくウィーン郊外のハイリゲンシュタットで行なわれたのでしょう。ベートーヴェンは夏になると、しばしば保養地を訪れ、作品の構想を練るという習慣がありました。ハイリゲンシュタットは、ウィーンの有名な保養地で、1808年の夏、ベートーヴェンはここに居を構え、総譜の完成につとめています。

また、ベートーヴェンは習慣として作曲の合間に、周辺の自然のなかを散歩し、作品の構想を暖めました。(田園)のときも、ハイリゲンシュタット周辺を歩きながら、作曲を進めたようです。小鳥のさえずり、深い新緑、眼下に広がるブドウ畑。こうしたハイリゲンシュタットの風景は、(田園)のイメージづくりに重要な役割を演じたことでしょう。

チャールズ・ニート(1784～1877)は、イギリス人のピアニストで、作曲家でした。彼は、1815年から16年にかけて8ヶ月間、ウィーンに滞在し、ベートーヴェンと親しくなりました。そして、ベートーヴェンの散歩にも同行したと言います。その様子を A.W.セイヤー(1817～1897、著名なベートーヴェン伝記作家)がインタビューし、次のように記しています。

ニート(彼は著者と会った1861年当時、80歳近かった)は、長い人生のなかであれほど自然を楽しんだ男を見たことがない、と言った。ベートーヴェンは花を見ても、雲を見ても、なんでもものすごく感動したそうだ。「自然は、彼にとって食料のようなものでした。そのなかでこそ、彼は本当に生きているのだ、という感じがしました。」野原を歩いては、ちょうどいい土手があると、どこでもそこに座り、思うがままに思索をめぐらした…(中略)…バーデン近くの野原を歩いたとき、ニートは《田園》交響曲について、そしてベートーヴェンの音楽による絵画的手法の才能について、尋ねてみた。すると、ベートーヴェンは答えた。「作曲しているとき、私の頭のなかには、常に画像があるんだよ。そうやって、創作意欲を刺激するんだ。」

『ベートーヴェンの生涯.下』セイヤー著より

この文章を読みますと、ベートーヴェンが野原で“どっこいしょ”と座り、友と語らっている様子が浮かび上がってくるようではありませんか？きっとゴロっと転がって、昼寝なんかもしたに違いありません。そんな、身近なベートーヴェンの姿を思い起こさせます。夏の強い日差しのなか、こうした散歩をかさねながら、ベートーヴェンは(田園)の作曲を着々と進めました。それでは、ここで、これまでの作曲の流れを年表にまとめてみましょう。

〔年表〕

- 1803～04年……“エロイカ”スケッチ帳に四つの断片的スケッチ
- 1807年7～8月……1枚のスケッチ紙に(田園)の四つの楽章のコンセプトを記入
- 1808年3月……(運命)が完成し、(田園)の本格的スケッチ作業を開始
- 1808年夏……ハイリゲンシュタットで(田園)の総譜、パート譜を作成

初演の状況

夏が過ぎ、秋のウィーンにベートーヴェンは戻ってきました。その手には〈田園〉の総譜があります。また、演奏者のためのパート譜もすでに作成が終わっていました。そして1808年10月末ないし、11月はじめ頃、ベートーヴェンは、有力なパトロンの一人、ロブコヴィッツ伯爵(1772～1816)に呼ばれ、宮殿のあるボヘミアのアイゼンブルク(現、イエゼジー)にむかいます。ここでプライベート演奏会を開き、どうやらそこで〈田園〉を演奏したようです(図1参照)。おそらく、これが歴史上、初めて〈田園〉が現実の音となった瞬間だったのでしょう。



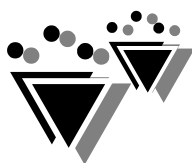
(図1)ロブコヴィッツ伯爵のボヘミアの宮殿

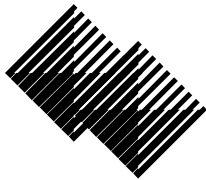
さて、今度は劇場公開の初演です。1808年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場にて、ベートーヴェン主催の演奏会が行われました。夕方6時半に開演し、その第1曲目が〈田園〉だったのです。そして、アリア(ああ、裏切り者)(作品65)、ラテン語の歌詞による賛歌(おそらくミサ曲八長調からグローリア)がつづき、前半の最後はピアノ協奏曲第4番が飾りました。そして後半は、〈運命〉で幕をあげ、ラテン語の歌詞による聖歌(おそらくミサ曲八長調からサンクトゥス)、ベートーヴェンによるピアノ即興演奏がつづき、演奏会の最後は〈合唱幻想曲〉(作品80)で締めくくられました。全8曲です。なんと盛りだくさんな内容でしょう。「傑作の森」と呼ぶしかない、充実したプログラミング。ベートーヴェンとしては、まさに勝負をかけた一世一代の演奏会でした。

ところが、結末は悲惨でした。この演奏会はベートーヴェンにとって、生涯忘れられない、最悪の演奏会として終わったのです。やはり曲が多すぎたのです。特にいけなかったのは、演奏会の最後にすえられた〈合唱幻想曲〉。これは、演奏会のわずか半月前に急遽、作曲され、プログラムに加えられました。ですから、ほとんど練習の時間もなく、バタバタで本番をむかえてしまったのです。当然、演奏は乱れ、なんと途中で一回止めて、もう一度最初からやり直すという大失態を演じたのです。

演奏会後のベートーヴェンのショックは、相当なものでした。彼は、ウィーンを去る決意をし、ドイツのカッセル宮廷楽長の職を引き受けようとしています。こうしたベートーヴェンの決意を知って驚いたのは、彼のパトロンたちです。そこで彼らは集まり、話し合った結果、三人の有力貴族(ルードルフ大公、ロブコヴィッツ侯爵、キンスキー侯爵)が共同で、ベートーヴェンに終身年金4000フローリンを与えるという条件を出しました。それと引きかえに、ウィーンにとどまるよう説得したのです。ベートーヴェンは、それに合意し、ウィーンに残ることにしました。ベートーヴェン、38歳のときのことです。

加藤拓未(かとう たくみ・ベートーヴェン研究所研究員)





《田園》交響曲その後 安田和信

規範となったベートーヴェンの交響曲

ベートーヴェン以降、交響曲が無用になったことは立証済みであるように、私には思われる。実際、シューマンの場合も、メンデルスゾーンにあっても、交響曲は、すでに力がおとろえた同一の形式のうやうやしいくりかえしでしか、もう、ないではないか。(中略)とすればベートーヴェンの真の教訓は、古い形式を保持することではなかった。まして先人の足あとをそっくり同じに踏まねばならない、ということではなかった。あけはなたれた窓々から、自由な空を仰がねばならぬのであった。その窓はほとんど永久に閉ざされてしまったかのごとく、私には見える。
ドビュッシー音楽論集 ドビュッシー著 平島正郎訳

このドビュッシーの文章は、20世紀の最初の年、1901年に発表されたものです。19世紀の作曲家たちが置かれた立場を、やや皮肉混じりながら端的に表現していると言えるでしょう。ベートーヴェンの音楽は、彼の存命中も高い人気を誇っていましたが、他の音楽家への影響力はむしろ死後にこそさらに強まっていったと考えられます。とりわけ、彼が残した9曲の交響曲は、ベートーヴェン以降の作曲家たちの交響曲創作にとって大切な規範となりました。あるいは、後世の作曲家たちが交響曲を作曲する以上は、ベートーヴェンを乗り越えるとはまではいなくても、彼に匹敵するような作品を残さなければならないというプレッシャーを感じるようになったのです。「交響曲が無用になったことは立証済み」で、ベートーヴェン以降の交響曲が「すでに力のおとろえた同一の形式のうやうやしいくりかえし」に過ぎぬとは、いささか暴論かも知れませんが、しかし、単なる「くりかえし」とみなされないように、独創性を作品に盛り込まなければならないという意識は、間違いなく19世紀のシンフォニスト(交響曲作家)たちに共有されていたのです。

交響曲創作における独創性への意識はベートーヴェン以前、18世紀の作曲家ならば、後世の同僚たちほど強く感じるものではありませんでした。モーツァルトは多めに見積もって70曲前後、ハイドンは100曲以上の交響曲を残しています。彼らがかくも多量の交響曲を残すことができたのは、1曲ごとに異なる性格や手法を盛り込む必要性をあまり感じていなかったからに他なりません(ハイドンやモーツァルトの交響曲から独創性を強く感じ取るとすれば、それはむしろ我々がベートーヴェン以降の作曲家や聴衆たちと同じような聴き方をしているということなのでしょう)。独創性が盛り込まれ、作曲者の死後も「芸術作品」として鑑賞し続けるに値するもの、演奏会のメインとして演目の最後を飾るに相応しい音楽が交響曲であるならば、交響曲はベートーヴェン以降に、彼を良くも悪くも規範と仰がねばならなかった19世紀に誕生したものと言えるのではないでしょうか。

《田園》交響曲と19世紀のシンフォニスト

一口にベートーヴェンの交響曲と言っても、それこそ9曲は相異なる性格や手法を持っています。とくに《田園》交響曲は他の8曲にはみられない特徴があります。全体を4楽章ではなく5楽章構成とした点、そして各楽章にタイトル(標題)が付けられている点です(これらは18世紀以来の「シンフォニア・カラクテリスティカ」によく見られる特徴でした)。この2点を共に特徴とす

る交響曲として有名なのは、ベルリオーズの《幻想交響曲》(1830年)でしょう。「ある芸術家の生涯における挿話」という副題をもつこの作品は、阿片を吸引した芸術家が体験する幻想的な情景を描いており、《田園》交響曲とは全く内容が異なります。しかしながら、ベルリオーズはこの作品を作曲する前年の1829年に《田園》交響曲を詳しく勉強したと言われており、全体の構成に関するヒントを得たのではないのでしょうか。また、第3楽章「野辺の風景」は《田園》交響曲と同じく、明らかに「パストラレ」の伝統を踏まえて作曲された楽章と思われる。

《田園》交響曲にみられる独特な特徴は他にもあります。もう一つだけ挙げておきましょう。この作品の第5楽章は最後の和音はフォルティッシモですが、楽器編成にはティンパニが欠けており、弱音が主体となって終結を迎えます。他の8曲では、ベートーヴェンらしい「男性的」な力強い終結が果たされているだけに、《田園》交響曲の終結はたいへん印象的です。弱音で終結する交響曲としては、ルートヴィヒ・シュポーアの第4番《音の奉納》(1832年)と第7番《人生における現世的なものとの神聖なもの》(1841年)、リストの《ダンテ交響曲》(1855年)、ブラームスの交響曲第3番(1883年)、チャイコフスキーの交響曲第6番《悲愴》(1893年)、マーラーの第4番(1901年)などが挙げられます。これらの作品はそれぞれ異なる理由で力強い終結を持っていないと思われるのですが、弱音で終わるという発想が成り立ち得たのも、もしかしたら《田園》交響曲がきっかけとなったのかも知れません。

「自然の中のベートーヴェン」のイメージ

《田園》交響曲の特徴は、後世の作曲家たち、あるいは聴き手にとって作曲上の技術的な問題としてのみ捉えられていたわけではありませんでした。自然の情景を描いた交響曲という点が、この作品はもちろん、ベートーヴェンの人物像にも大きな影響を与えたのです。たとえば、先に触れたベルリオーズは画家のニコラ・プーサンやミケランジェロを引き合いに出しながら、この交響曲を「素晴らしい風景画」に例えています(1838年)。第2楽章「小川の情景」について、「目は空を仰ぎ、耳は風のささやきに傾けられ、何百何千もの楽しく魅惑的な音と光の反映にうっとりとしながら、ベートーヴェンが草の上に横たわり、瞑想的な観察にひたりつつ創作したであろうことは疑問の余地はない」と書くに至っては、まるで作曲中のベートーヴェンを見てきたかのようです。自然の中に身を委ね、その美しさに浸りながら《田園》交響曲を作曲するベートーヴェン——こうしたイメージは19世紀には絵画の主題にさえなっています(展示パネルのヘーギやシュミットの作品参照)。そこには、《運命》交響曲のベートーヴェン、「運命動機」を徹底的に使用しつつ、「苦悩から歓喜」へ至るまでの激しい闘争を繰り広げるベートーヴェンの姿はありません。どちらも彼の一面には違いないですが、少なくとも《田園》交響曲からは闘士のイメージはあまり浮かんでこないのではないのでしょうか。

《田園》交響曲に何を聴く----《運命》との対比から

《田園》交響曲との対比として《運命》交響曲を持ち出してしまいましたが、この2曲の性格の違いは、創作時期が重なっているためか、多くの人を感じることです。ドイツの音楽学者ヴァルター・リーツラーは両作品の平行した作曲の背景を、「第五の仕事が要求した超人的な集中が、最大限度的に反極的な作品の中にその緊張を弛めることをベートーヴェンに強いたためである」と説明し、ベートーヴェンが《運命》以上に「凝縮された音楽」を、《田園》以上に「緊張や凝縮をもっていないゆるやかな音楽」を書いていないと指摘しています(「ベートーヴ

エン、リーツラー著 寛潤二訳 1936年)。凝縮と弛緩、ポジとネガのような関係にあるのがこの2曲の交響曲ということでしょう。

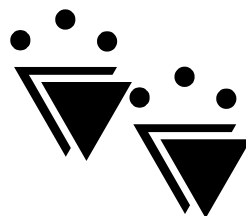
こうした対比は確かに事実かも知れませんが、「実はそうではないのだ」と完全に否定することは無理です。ただし、この2曲から共通した特徴を聴き取ることもできるのではないのでしょうか。

〈田園〉の第1楽章が冒頭主題に含まれる諸動機によって組み立てられていることは、〈運命〉ほどではないですが、重要な特徴です。同じ楽章の再現部において、第1主題の再現は第1ヴァイオリンのみによるカデンツァ風な楽節が挿入されています。これなどは、〈運命〉の第1主題再現におけるオーボエ・ソロにも似た機能を果たしているように聞こえることもあるでしょう。〈運命〉の第3楽章は通常とは異なる形式を持っていますが、同じような破格な形式の扱いは〈田園〉にも共通しています。

〈運命〉の第4楽章では、歓喜が爆発する第1主題の再現の前に第3楽章からの引用があり、第3楽章から第4楽章へ、「苦悩から歓喜へ」のドラマティックな変転も再現されています。〈運命〉ほどははっきりと知覚できるものではありませんが、〈田園〉においても、第4楽章から第5楽章への経過的な楽節が、大きく姿を変えてはいるものの、第5楽章の第1主題再現に先だって使われています。嵐の去った後の虹を表すとも言われるこの経過的な楽節は、コラール風のゆったりとした順次下行進行に基づいており(パッサールのコラールからの引用と指摘する研究者もいます)、第4楽章冒頭で雨が降り始めたことを表すかのような第2ヴァイオリンの音型とも関連づけられます。スケッチ帳では、この虹の経過的な楽節が書かれたページに、先に触れた第5楽章の音型も書き込まれていますから、ベートーヴェンはこの二つの楽節を関連づけていたに違いありません。

ここで言及した〈運命〉と〈田園〉の類似性は、この作品で対照的な内容をもつという側面を否定するほどのものではないでしょう。しかし、ベートーヴェンの楽譜から何かを発見しようと努めるとき、私たちの耳や目は既存の考えやイメージに必要以上に囚われてはいけな思われま。得てして、人間は自分が見ようと欲したものしか見ることができません。そうした危険を常に意識しつつ〈田園〉を聴くことで、この傑作がもつ豊かなイメージの世界を広げていきたいものです。

安田和信(やすだ かずのぶ・ベートーヴェン研究所所員)



展示パネル紹介

加藤拓未・安田和信

《田園》のウィーン

ベートーヴェンの散歩道

ウィーンの北部に位置するハイリゲンシュタットもベートーヴェンが夏期の滞在地として好んだ街であった。「ベートーヴェンの散歩道」は楽想を練るために、よく散歩したとされる森の中の静かな小道で、現在では観光の名所となっている。ここを歩きながらベートーヴェンは、《田園》交響曲の第2楽章のアイデアを暖めたのだろうか。

藤本一子撮影

ハイリゲンシュタットの風景

自然に恵まれたウィーン近郊の保養地。夏になるとベートーヴェンは、しばしばこうした保養地を訪れ、作品の構想を練った。1808年の夏も、ハイリゲンシュタットに居を構え、《田園》交響曲の完成に努めた。

Ludwig van Beethoven : edited by Joseph Schmidt-Görg and Hans Schmidt. 請求記号 C37-748

パスクワラーティ・ハウス

ベートーヴェンが、《田園》交響曲の創作に励んでいた頃に主に住んでいた住居。名称は建物の所有者ヨハン・バプティスト・パスクワラーティ男爵にちなんでいる。当時のウィーンは、現在の環状道路(リング)部分に城壁が聳え立ち、城壁には高台状の保塁が12ヶ所あった。このパスクワラーティ・ハウスはその保塁の一つに建てていたためベートーヴェンは眺望の良さを気に入っていたという。

Ludwig van Beethoven : edited by Joseph Schmidt-Görg and Hans Schmidt. 請求記号 C37-748

アン・デア・ウィーン劇場(外観)

エマヌエル・シカネーダー(1751~1812。モーツァルトの《魔笛》の台本作家として有名)を支配人として1801年に開場した私設劇場。

絵は1803年頃のもの。ベートーヴェンはこの年、同劇場からオペラの作曲を依頼され、契約を結ぶ。そして劇場の2階に住み込み、オペラ《レオノーレ》(《フィデリオ》)の初期稿)を作曲した。《運命》《田園》両交響曲の初演もこの劇場で行われている。

『ベートーヴェン全集』第3巻 講談社 請求記号 C62-422

アン・デア・ウィーン劇場(内観)

劇場の内部の図(1825年頃)。客席は1階の平間の席と、馬蹄形に並ぶ1~5階席で構成されている。ただし、画面中央左に見える舞台袖付近の各階席は、ボックス席になっており、特に2階席の舞台真横、幕の張ってあるボックスは皇帝専用の席である。

『ベートーヴェン：偉大な創造の生涯』H.C.ロビンズ・ランドン 新時代社 請求記号 C7-149

バーデンの風景

バーデンは、ウィーンの南西に位置する有名な保養地で、ベートーヴェンも 1803 年からほとんど毎年のように夏季に滞在している。ウィーンという都市に住む彼にとって、バーデンは自然を満喫するための最も身近な場所だった。

『ベートーヴェン全集』第 9 巻 講談社 請求記号 C64-256

メートリングの風景

メートリングも、バーデンと同じくウィーンの南西にある田園地帯。ベートーヴェンは 1799 年の夏に初めてメートリングを訪れている。毎夏、バーデンへ訪れる道すがら、ベートーヴェンはメートリングの田園風景に心を癒されていたのかもしれない。

『ベートーヴェン全集』第 9 巻 講談社 請求記号 C64-256

作曲当時のベートーヴェン

ベートーヴェンの肖像画

1806 年頃。ベルリン出身の画家イシドール・ノイガスによる油彩画で、現在はボンのベートーヴェンハウス所蔵。(田園)交響曲の本格的スケッチを開始する前年のベートーヴェンの姿を伝える肖像画の一つである。この肖像画は、ベートーヴェンの主要なパトロンの一であったカール・リヒノフスキーの依頼で描かれたと言われる。

E.Herttrich: Ludwig van Beethoven 発注中

メーラー作のベートーヴェン肖像画

ウィーン在住の画家、ヴィリブロルト・ヨーゼフ・メーラー(1778～1860)が 1804 年に描いた 34 歳のベートーヴェンの肖像画。美しい田園風景と古代神殿を背景に、座するベートーヴェンは、左手にリラ(音楽の神アポロを象徴)を持ち、右手は絵を見る者に何かを訴えかけているようである。

『ベートーヴェン全集』第 4 巻 講談社 請求記号 C63-060

ベートーヴェンの肖像画

シュノル・フォン・カロルスフェルトによる 1810 年頃作の鉛筆画で、(田園)交響曲創作を終えたベートーヴェンの姿を伝える。イタリア出身の商人ヤーコプ・フォン・マルファッティ家の夜会に集う人々を描いた"肖像画集"の中の 1 枚である。ベートーヴェンはマルファッティ家の令嬢テレゼに求愛したが拒絶された。通称(エリーゼのために)として知られるピアノ曲は、このテレゼのために作曲されたのではないかとされている。

『ベートーヴェン全集』第 6 巻 講談社 請求記号 C63-520

《田園》を献呈された貴族

ラズモフスキー伯爵

アンドレイ・キリロヴィチ・ラズモフスキー伯爵(1752～1836、後に侯爵)は、ロシア皇帝と所縁の深い名門貴族。ロシア特命大使としてウィーンに駐在する。たいへんな音楽愛好家で、自

らヴァイオリンを演奏した。ベートーヴェンは伯爵のために3曲の弦楽四重奏曲 Op.59 (ラズモフスキー四重奏曲) を作曲したほか、(運命)、(田園)交響曲を献上している。

『ベートーヴェン全集』第2巻 講談社 請求記号 C62-825

ロブコヴィッツ侯爵

フランツ・ヨーゼフ・マクシミリアン・フォン・ロブコヴィッツ侯爵(1772~1816)は、ベートーヴェンの主要なパトロン之一人。熱狂的な音楽愛好家で、ウィーンの自邸にオーケストラを抱え、ベートーヴェンが自作の交響曲を試演する際は、この楽団と会場を提供した。ベートーヴェンは、侯爵に(英雄)(運命)(田園)の各交響曲、歌曲(はるかな恋人に寄す)などを献上している。

『ベートーヴェン：偉大な創造の生涯』H.C.ロビンズ・ランドン 新時代社 請求記号 C7-149

(田園)交響曲が初演された演奏会のプログラム

1808年12月22日に行われた(田園)交響曲初演の演奏会について、ライブツィヒで刊行されていた雑誌『一般音楽新聞』が1809年1月25日号で批評を載せた。これはこの演奏会全体のプログラムの掲載ページとプログラム部分の訳である。それによれば、(田園)交響曲が「第5番」として演奏会第1部の冒頭を飾り、「第6番」とされた(運命)交響曲で第2部を開始していることがわかる。

Allgemeine musikalische Zeitung 1. Jahrg. (3. Oct. 1798 bis 25. Sept. 1799)-50. Jahrg. (1848) Reprinted 請求記号 P4 (11)

『ベートーヴェン全集』第6巻 講談社 請求記号 C63-339

《田園》の完成まで

(田園)交響曲のスケッチ

1808年1月頃から9月にかけて使用された『(田園)交響曲スケッチ帳』(大英図書館所蔵)の第1ページ。右はオリジナルの写真で、左は訳譜(ダグマール・ヴァイゼ編)。有名な第1楽章冒頭主題のスケッチが右上部にみられるほか、第1楽章のためのスケッチが書き込まれている。

Ein Skizzenbuch zur Pastoralsymphonie op. 68 und zu den Trios op. 70, 1 und 2 請求記号 C39-892(2)

Ludwig van Beethoven : Sechste Symphonie F-dur Opus 68 請求記号 J91-624

(田園)交響曲の自筆総譜

最初のページで、第1楽章冒頭の6小節まで。現在の習慣とは異なり、第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラの声部が上部に書かれ、管楽器、バス声部の順に書かれている。ベートーヴェンはスケッチを終えた後、この自筆総譜を1808年4月頃より書き始め、夏には完成した。ボン・ベートーヴェンハウス所蔵。

Ludwig van Beethoven : Sechste Symphonie F-dur Opus 68 請求記号 J91-624

(田園)交響曲の筆写総譜

ベートーヴェンの自筆総譜に基づき、写譜職人のヨーゼフ・クルンパールが作成。ベートーヴェンは、この筆写楽譜に訂正を施したうえで、印刷楽譜の底本として使用した。この筆写総譜は長らく行方不明だったが、1984年にドイツで再発見された。

Ludwig van Beethoven : Sechste Symphonie F-dur Opus 68 請求記号 J91-624

自筆総譜 第2楽章終結部

第2楽章終結部では、第1フルートがサヨナキドリ、第2オーボエがウズラ、そしてクラリネットがカッコウの鳴き声を真似た楽節が現れる。鳥や動物などの鳴き声を模すことは、18世紀の器楽曲で好まれた一つの語法であった。上はその自筆総譜である。当初はこの「鳴き真似楽節」は反復せずに終止するという構想だったが、反復するように改められた。

Ludwig van Beethoven : Sechste Symphonie F-dur Opus 68 請求記号 J91-624



展示楽譜紹介



加藤拓未・安田和信

(田園)交響曲 指揮者用総譜

ジョナサン・デル・マー校訂。現存する主要資料をすべて参照して校訂が行われた目下最新の批判版。詳細な批判報告書のほか、2001年にはこの版に基づくミニチュア・スコアも出版されている。

カッセル ベーレンライター社 1998年 請求記号 H37-846

小川でのベートーヴェン

小川のそばに佇むベートーヴェン。その手には鉛筆と五線紙があり、(田園)交響曲を作曲している。自然の中で作曲の靈感を得るベートーヴェンのイメージがこの絵画からも窺える。フランツ・ヘーギ(1774~1850)による銅版画(1834年頃)をもとに着色した水彩画。

Ludwig van Beethoven : Sechste Symphonie F-dur Opus 68 請求記号 J91-624

散歩するベートーヴェン

ユーリウス・シュミットによる 19 世紀末の色彩版画。ベートーヴェンは自然を好み、郊外での散歩を好んだが、この後世の版画では、孤独のなかで思索する楽聖ベートーヴェンというイメージが強調されている。

国立音楽大学所蔵 『ベートーヴェン全集』第 10 巻 講談社 請求記号 C64-564

(田園)交響曲初版

初版パート譜 第 1 ヴァイオリンのパート譜

左ページに各楽章のタイトル、右ページに第 1 楽章冒頭。

初版パート譜 第 1 オーボエのパート譜

第 2 楽章冒頭から第 3 楽章途中までの 2 ページ。第 2 楽章終結部、鳴き真似の個所に「ウズラ Wachtel」の表記がある。

初版パート譜 チェロ、コントラバスのパート譜

左ページ下部に、「第 1 と第 2 のチェロ・ソロは弱音器を付けて、トゥッティのチェロはコントラバスとともに」との注記がある。

ライブツィヒ フライツコップ・ウント・ヘルテル社 1809 年 請求記号 M2-258

自然の中のベートーヴェン

1837 年、モーリッツ・フォン・シュヴィントの作。3 つの絵画からなる「三つ折聖画像」の様式に従った作品で、ベートーヴェンとその音楽の神格化が作曲者の死の直後から始まっていたことを窺がわせる。自然の中で思索にふける姿を描いたこの絵画の主題は、別掲のシュミットの版画にも継承されていると言えるだろう。

S.Bettermann: Moritz von Schwind und Ludwig van Beethoven 発注中

ユスティーン・ハインリヒ・クネヒトの肖像画

ユスティーン・ハインリヒ・クネヒト(1752 ~ 1817)はビーベラ八生まれの作曲家、オルガニスト。音楽理論家としても活動している。(雷雨によって妨げられた羊飼いの至福の時)(1794 年)など、標題をもつ音画的なオルガン音楽で人気を博した。

クネヒト(自然の音楽的描写) 総譜

この交響曲の 5 つの楽章には、具体的な描写内容を表すタイトルが付けられており、それらはベートーヴェンの(田園)交響曲とほとんど同じである。1784 年の初版はシュパイヤーのポスラー社より出版されたが、その前年には同社はベートーヴェンの(選帝侯ソナタ)WoO47 を出版しており、ベートーヴェンはこのクネヒトの作品を知っていた可能性が高い。

ニューヨーク ガーランド社 1984 年 請求記号 A8-467

バッハ(クリスマス・オラトリオ) BWV 248 自筆総譜ファクシミリ版

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685 ~ 1750)の(クリスマス・オラトリオ)は 1734 ~ 35 年の降誕節の期間に演奏された 6 曲のカンタータからなる。この作品においても、パストラーレの様式が散見される。第 2 部のシンフォニアでは木管楽器が活躍するが、これは羊飼いの笛を象徴

している。羊飼いは、アルカディア(理想的田園)において迷える子羊たる人間を導くキリストの象徴である。「パストラレ=キリスト教」の連想は、ベートーヴェンの時代にも失われていなかった。

カッセル ベーレンライター社 1960年 請求記号 H10-094f

(田園)交響曲初版総譜

ベートーヴェンの時代は交響曲を総譜の形で出版することが徐々に普及していった。その背景には、交響曲というジャンルがより複雑なものとなっていき、耳で聴くだけでなく、総譜を目で見ることによってより詳しく研究をしたいという愛好家が増加していったことがあった。

ライプツィヒ ブライトコップ・ウント・ヘルテル社 1826年 請求記号 Mf6526

ヘンデル(メサイア)初版総譜(第5刷)

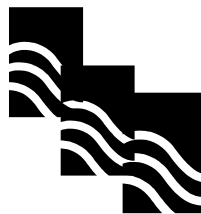
(田園)交響曲はパストラレの遙かなる伝統を汲んでいる。パストラレと田園の情景を描写する音楽作品を指すとともに、キリスト教にあってはキリストの生誕と関連づけられた音楽を指していた。ジョージ・フリデリク・ヘンデル(1685~1759)のオラトリオ(メサイア)では、キリストの生誕を描いた第1部において、「ピファ」と題された器楽の間奏曲があり、これはパストラレの様式を踏まえている。低弦部にみられるドローンなどは、(田園)交響曲でも多用されているものである。(メサイア)は、モーツァルトによる編曲版によって、ベートーヴェン時代のウィーンでも上演されていた。

ロンドン ランダルN&アベル社 1769年頃 請求記号 Mf4900

ハイドン(四季)初版総譜

ハイドン晩年のオラトリオ(天地創造)と(四季)は音による自然描写に満ちており、その手法は(田園)交響曲にも強い影響を与えたと思われる。とりわけ(四季)の第2部「夏」におけるジューモンのアリア 陽気な羊飼いは羊の楽しげな群れを集め では、ホルンの奏する音型が(田園)交響曲の終楽章を彷彿とさせる。

ブライトコップ・ウント・ヘルテル社 1802年



図書館展示
2005.9.5-10.8

《田園》交響曲
自然の中のベートーヴェン

国立音楽大学附属図書館 広報委員（染谷周子・高田涼子）
2005.9.27